禍を転じて福となす

今は歩み始めた、力強い足どり

待鳥さん一家、連帯に包まれて

四山鉱坑内仕繰の待鳥英勝さん（四十七歳）一家が、思わぬ火災にあって焼け出されたことは本紙前号で伝えたが、その後四山指導部で待鳥さんが所属する職場四分会（立山義人分会長）を先頭に、ただちに差しのべられた三池労組全組合員・家族の連帯の手にしっかりとささえられながら、再起をめざし力強く立ちあがっている。

家族は本人のほかに、妻の道子さん（四十五歳）と長女の由紀子さん（看護学院在学中。在菊池）、次女の友子さん（高校在学中）の三人がある。

被災したのは大牟田市小川開アパート三棟の三階に居住中で出火は昨年十二月二十一日の夜明け前のこと。文字通り全焼だった。

何よりも、たまたま二十五日後には〝成人式〟を迎えるのでそのためにやっとできてきていた晴着一式を灰にされてしまった長女由紀子さんの思いが痛ましかった。

さいわい、さっとかけつけてきてくれた組合員なかまの手で火事跡の取りかたずけから移転にいたるまで、見るみるうちに完了し、また一家が急場をしのぐのにと、組合員や主婦会員からのいろんなカンパが集まり、その再起をしっかりとささえていった。

妻道子さんの話

荒尾市大島社宅二百五棟の新居をたずねると、留守を守っていた妻の道子さんは次のように語った。

「何もかも、組合員・主婦会員皆さんのおかげです。跡かたずけから、住まいの移転、それに必需品や多額のお金をカンパしていただいたり。組織というもののありがたさを、こんどほどしみじみと思ったことはございません。きっと、新労組の皆さんもびっくりなさってくださったことでしょう。

私は四十五歳で初めての苦しい体験でございましたけれどもくやしさや悲しさも、いっぺんに吹っ飛んでしまいました。

これからは、いっそうがんばってゆく確信が固まっています。これまで以上に主人と固く手をつないで、歩いてゆこうと決意しております。子どもたちにも、きっとよい体験になってくれることを信じております。

ほんとにありがとうございました。心からお礼を申し上げます」

待鳥さん一家は、すでに力強く生活再建に立ちあがっている。格言の、「禍を転じて福となす」という言葉を思い出す。待鳥さん一家の歩みこそ、まれに見るその典型だ。

×

なお待鳥さんから、正式に組合あてにお礼状をいただいています。ご紹介しておきます。

※　※　※

勝立地域 まき起こった住民運動

ひと雨降ればすぐ氾濫

大牟田川の水路変更を

今勝立地域（大牟田市）の全住民をまきこんで、大牟田川の水路変更を要求する運動が猛烈な勢いで広がっている。福岡県議会でもついに審議の対象となり、いよいよ土木委員会が実態調査にのり出した。三池労組として福利厚生闘争を目前にするとき、注目にあたいすることだ。

とかく問題を起こす大牟田川は、その上流に位置する勝立地域でも大きな問題を発生させている。

同地域住民は、ひと雨降るごとにハラハラ。というのは、ちょっとした雨でも、同川が同地帯一帯に氾濫するからである。

大砂社宅の下の一部、通松社宅勝立事務所、馬渡社宅、軒を並べている民家、スーパーマーケットなど、すぐ泥水の侵入に見舞われる。床上侵水で泣くことも、けっしてめずらしいことではない。

何がその原因か。第一に同川がむやみやたらと曲りくねっていること。

第二は、長年放置されてきているために、すっかり川床が浅くなってしまっていること。

だからといって、勝立地域だけに限って、川の水路を少し手直ししたり、川床を浚渫したりするわけにもいかぬ。というのは、それをやれば、こんどは勝立地域に変って下流に流水がどっと流れこんでいくために、そこで大氾濫が発生することになるから。だから、大牟田川全体を、いまやどうするかという大問題にぶつかっているのである。

大牟田川の全面的な水路変更―。それにはかって三井鉱山の社内鉄道が走っていたあの廃線路を、水路に変えることが第一となるわけで、すでに買収も済んでいる。従って一日も早く、「その線路に沿って、大牟田川水路の変更を」、というのがこの全地域住民の切なる要求。

運動は今、同地域内の公民館の手ですすめられ、浦川守県議、連尾信治郎、湯村誠男両市議などの力添えで、福岡県議会にもちこまれた。（同川は県の管理）が、もともと火をつけたのは、三池労組の通松、大砂、馬渡の各地域分会だった。

集まった署名約千百人。すでに県議会が問題として取り上げるまでになったが、果たして実りはいつか？

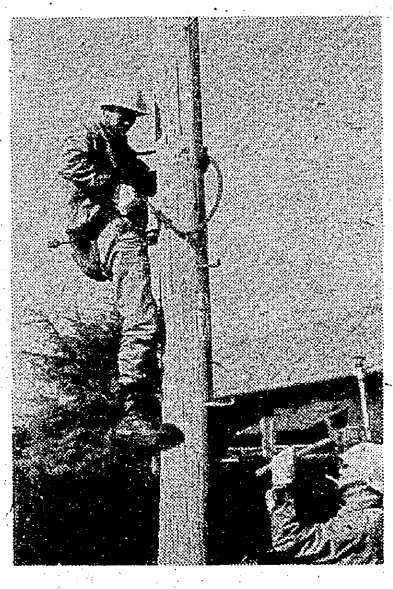
組合、福利要求闘争へ

今、三池労組は職場・地域とも、福利・厚生闘争を起こそうと準備をすすめている。まず要求を掘り起こすことが、いそがれている。

調べるまでもなく、川床は浅くなつてしまい、荒れ放題だつた。

すぐ川が氾濫するので、家の入口には少しでも水の侵入をふさごうと、ビニールの土嚢が。

三池合板労組の「工場閉鎖・首切り反対闘争」は、年を明けてたたかいつづけられている。物品販売も身につき、男手ながらミシンも踏む。広がる連帯に、希望も湧く。



線路名称の書きかえ

本来作業奪う資本の合理化

▼…資本の合理化はここにも。本所指導部二分会は、電気と水道の部門で働く組合員の結集体。分会長の西山正勝さんは水道関係で、かっては独立の電気課だったのが水道課と一つにされて施設課と呼ばれている。

▼電気（現場員）だけでも、かっては二百人もいたのが、今は二十数人に減らされてしまい、例の請負工がかなりはいってきた。

本来の架線、電灯敷設工事など請負工。新労組員がもっぱらその監督格。

ここで五人ほどの三池労組員が働いているが、この方は線路巡回（例のタコが電線にひっかかったりしてはいないか）をやらされたり、天気の悪い日などアースづくりなどの仕事があてがわれる。落ちたもので、ときには電柱の一本一本に記されている「線路名称」の書き変えなどの雑仕事までやらされる。

「昔は外線関係の電柱建てから電線はりなどもやった」（組合員今岡進さん談）が、電気工本来の仕事はとりあげられてしまった。

合理化は恐ろしい。

逃げない人間になりたい

北海道　鈴木泰行

私たちが三池にまぶ会で学んだことをのべて、ともに闘う決意と大変お世話になりましたお礼のことばとしたいと思います。

一つは、「自分は本当に一生運動をやっていけるのか」を問い返えされたことです。三池の人たちは、正しく生きている自分に確信とほこりをもっていました。一生三池の労働者として生きていく、という信念を肌で感じたのです。

私たちの運動は辛く苦しい。仲間の脱落も裏切りもあります。サボりたいときもあります。しかし「全生活をかけて資本にたちむかっていきたい」、と話す三池労組の人たちと同じ気持に一日も早く成長したい、と思いました。そして、闘いから逃げない人間になりたいと思っています。

二つ目は、「資本に対するかまえ」に学んだことです。三池の人たちと私たちの決定的な違いは、資本に対する怒りや憎しみの強さでした。三井独占が憎い。国家機関である警察も裁判所も一緒になって攻撃してくる実態を、具体的につかみきっていることでした。

私たちは本当に、資本や当局、会社に対する怒りの感じかたに甘さがあったと思います。

三つ目は、「家族とは何か」を問い返えされたことです。私たちの仲間が「家庭と仕事とどちらが大切ですか」、との質問に三池主婦会の人は、「職場がなくなったらあなたはどうしますか。家族も生きていけないでしょう」と即座にでてくる言葉の中に、労働者とその家族は、労働力を売ってしか生きられない事実と、家族が「うちのお父ちゃんについていくしか正しい道はない」と、明るく話す言葉は、奥さんが夫を尊敬している姿として何よりも美しく感じたのです。

三池の主婦会が一つひとつの闘いの歴史のなかで、三池労組の強力な指導のもとに、家族ぐるみの闘いと団結をつくりあげてきたことを思うとき、私たちのまなぶ友の会運動の改善に必要なことは、何よりも友の会運営委員会の団結や労働組合の執行部の団結と指導力が大切であること、そのことなしには家族の団結も大衆運動の団結も生まれてこないこと、を感じたのです。

労働者に徹することを教えていただいた三池労組、主婦会のみなさん。

私たちはみなさんへのご恩返えしを、今後の運動でお返えしすることを誓いあいました。

必ず労働者に徹し、一生資本と闘うまなぶの仲間として成長していきたいと思います。

×

右の鈴木さんの一文は、まなぶ友の会札幌地区協議（札幌市中央区北三条西五丁目、北海道庁内、自治労北海道庁労組札幌総支部気付）会長としてのもので、「ぜひ北海道へお越しの節は大歓迎します」と、書きそえてありました。

×　×